

ケルムスコット・プレス版 ジェフリー・チョーサー作品集“騎士物語”における バーン＝ジョーンズの挿絵について―素描から完成まで―

吉田 公子（多摩美術大学美術館）

ウィリアム・モリス（1834-1896）は産業革命が進行中であったヴィクトリア朝時代において、壁紙やテキスタイル、ステンドグラス等の多岐にわたるデザインの分野で活躍した。

〈美しい家〉の次に望まれる芸術は、〈美しい書物〉であると公言したモリスは、理想とする書物を具現化するために、1891年にケルムスコット・プレスを設立した。その理想とする書物の条件は用紙と活字体、文字間の間隔、組版のレイアウト、装飾、挿絵と多岐にわたった。モリスは中でも挿絵について画家であり友人でもあったバーン＝ジョーンズ（1833-1898）の作品を「美しく想像力に富む絵」であり「印刷本と最高に調和のとれた装飾」であると高く評価していた。ケルムスコット・プレスでは閉鎖される1898年までに、53点の書物が生まれた。

世界三大美書と言われるケルムスコット・プレス版チョーサー作品集は、バーン＝ジョーンズによる挿絵が87点付されている。この書物は、13世紀に活躍した詩人ジェフリー・チョーサー（1343?-1400）の作品集である。モリスは忠実に再現するためにチョーサー作品集の中でもカンタベリー物語についてはエルズミア写本を底本とした。他の作品についてはW.スキート（1835-1912）が校訂したオクスフォード版チョーサー全集を底本とした。カンタベリー物語はカンタベリー大聖堂へ巡礼に向かう29名の旅人が道中に1話ずつ語り合う物語集である。24の物語からなるうち、バーン＝ジョーンズの挿絵が付されたものは、7話である。挿絵はバーン＝ジョーンズによって鉛筆で描かれた後にR.キャタースン＝スミス（1853-1938）がインクで描き直し、再度バーン＝ジョーンズの修整を受けて写真によって版木に転写され、W.H.フーパーによって彫版された。またその校正刷をバーン＝ジョーンズが確認した。バーン＝ジョーンズがこれらの工程に関わることで、画家本人の意図する挿絵が最大限に表現されることとなった。

本発表ではケルムスコット・プレス版チョーサー作品集におけるカンタベリー物語のうち“騎士物語”を取り上げ、バーン＝ジョーンズによる6点の挿絵についてテキストとの関連性を素描から完成までの経緯を追いながら分析し、バーン＝ジョーンズがモリスの理想にどのように応えたのかを明らかにする。